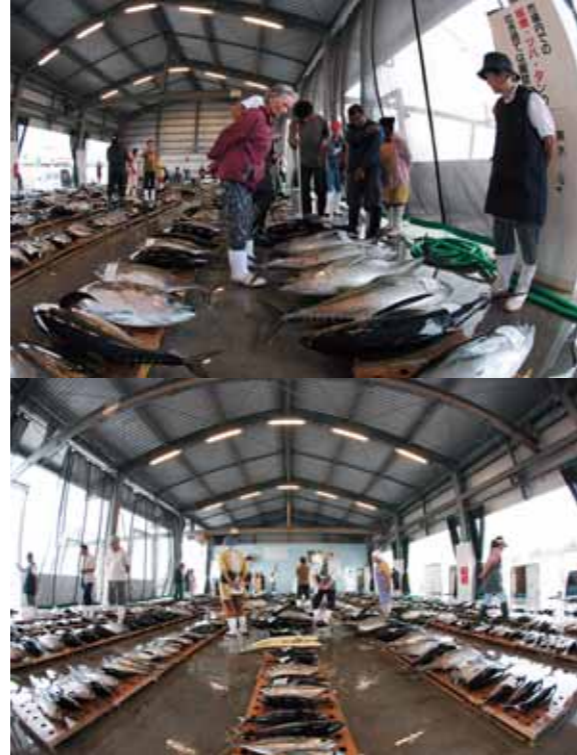
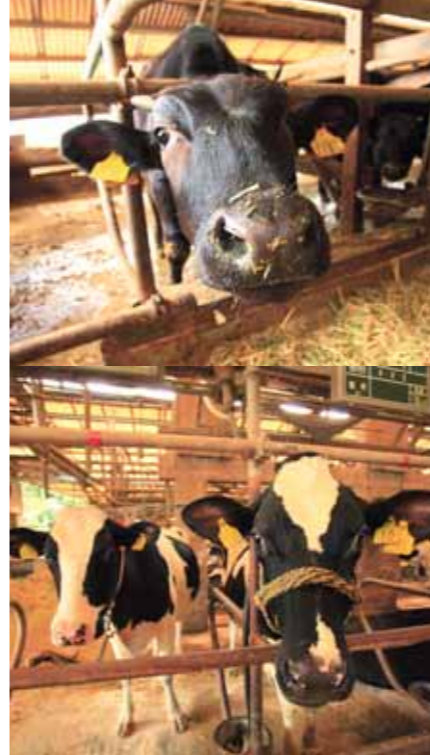




若手の育成に力を注ぐ上原清秀さん(左)と丸本隆さん



セリ場には、キハダマグロやメバチマグロなど新鮮な魚介類が並べられます



諸見里牧場で働く社員たち



酪農と和牛繁殖の複合経営で畜産の新しい挑戦に挑む諸見里真吉さん



上原さんのもとで一人前の漁師を目指してがんばる丸本さん

町 内唯一の漁業集落である港川では、漁業組合が中心になってパヤオやソデイカ漁を中心に小型船による漁船漁業が営まれています。二十キロから三十キロ沖合いに設置されたパヤオでは、キハダやメバチなどのマグロが主に水揚げされ、本マグロやカジキなどの大物が釣れることも。また、

パヤオ以外では、解禁日となっている十一月から翌年六月までの期間、ソデイカ漁も盛んに行われています。港川漁業協同組合員の上原清秀さんは、漁師として生計を立てて三十二年。長年の漁業技術、経営能力が評価され、平成十一年一月、県指導士の認定を受けました。また、港川に伝わる独特

舞台5 漁業

まちの漁業を支える漁師たち

漁師を志す若者が地域の漁業を支えていく

の石巻き落とし漁法を県内外の漁師に指導するとともに、若手の育成にも力を注いでいる人物です。近年、水産業を取り巻く状況も一段と厳しくなり、漁師の高齢化や担い手不足などが問題となっています。上原さんは、漁師を志す若者の発掘と育成の必要性を考え、「漁業就業支援フェア」にも足を運び後継者選別に積極的に取り組んでいます。平成十九年には、フェアをきっかけに福岡県出身の丸本隆さんが上原さんの下で乗組員として働きはじめました。上原さんは「後継者不足の時代に若くして漁師を志す青年が地域の漁業を支える。」と期待を寄せています。また、丸本さんも以前から憧れていた漁師となることができ「将来は自分の船をもち独立して地域漁業を支えたい。」と意欲を見せています。

舞台4 畜産

酪農と和牛の複合経営を行う畜産農家

牛はわが社の構成員社員と共に新しい挑戦へ



受精卵移植技術を活用し乳用牛から優良な和牛を生み出しています



牛は会社の構成員タイムカードで管理しています

八 重瀬町は、酪農や和牛繁殖、養豚・養鶏など、畜産経営の盛んな地域です。その中でも後原地域は、古くから酪農が盛んな地域として知られています。現在、酪農と和牛繁殖の複合経営で受精卵移植の新技术を活用した和牛子牛の生産が、家畜改良の迅速化が図れる決め手として大きく注目されています。

父、真次さんの代で開始した酪農「諸見里牧場」を引き継ぐ真吉さんは、受精卵移植技術を活

用し酪農と和牛繁殖の複合経営を町内で先駆けて行っている人物です。「牛は会社の構成員」という考えのもと、諸見里牧場では、牛の固体管理を会社風に行い、牛一頭一頭をタイムカードでチェック、社員たちの泌乳・受胎状況が一目でわかるように工夫されています。また、搾乳時に注意が必要な牛にはイエローカード、乳房炎の牛にはレッドカードが牛床の上に掲げられるなどのユニークなアイデアも随所に見られ、

このような管理方法が経営を円滑に導いています。「酪農はエサやり、乳絞り、牧場の掃除など日常の飼養管理が基本。しかし、繁殖に目を向けると、その一年に要所があり、そこを見逃すと必ず大きな反動となって返ってくる。だから社員一人ひとりの個性を見極め、長所を引き出し、欠点を補うことが大切。」と畜産経営の考え方を語る真吉さん。今後は、飼料畑が少ない現状の中で自給粗飼料の生産向上を課題に挙げながら、新しい酪農経営のあり方、受精卵移植技術等、乳肉複合経営の中での更なる向上を模索しています。「父がゼロから築き上げた牧場を完全にパトナッチでできていないところも多々あるが、親子三代・四代と酪農の火を消さないリレーをやっていたい。」と新しい挑戦に目を輝かせています。